

## 『エドワード3世』に見られる王権の意味の変化と喜劇性

## はじめに

かつてウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の戯曲は37作品と長らく考えられてきた。ここで取り上げる『エドワード3世』(*The Reign of King Edward the Third*, 1596)<sup>1</sup>は1990年代の後半になってから、シェイクスピア全集に収められるようになった作品である。タイトルは騎士道の華と言われた名君、エドワード3世という実在の王をモデルとしている。ガーター勲章の創始者として一般には知られているのではないだろうか。

名君としてのエドワード3世についてW・M・オームロッド(W. M. Ormrod)は「1360年代の半ばまでにエドワード3世は、家族の安定のための準備を行い、自分が存命中の政治的平和と自分がこの世を去るときに、争うものがないような継承について確立させた」(“By the mid-1360s, Edward III had therefore prepared the way for a family settlement that would guarantee political peace for the rest of his days and an uncontested succession when he died”)(416)とエドワード3世の安定した政権を裏付けている。これに部分的に重なるが若干違う意見を述べているルース・マゾ・カラス(Ruth Mazo Karras)は「平和のシステムの正義はエドワードの統治時代に、地方における法の行使の主な手段となり、国の階級制に対する地方の階級制を定めたが、地方と王政の間の利益についての内在する緊張は根強かった」(“The justice of the peace system, which became the main means of law enforcement on the local level during Edward’s reign, aligned the local hierarchies with the national one, but an inherent tension persisted between local and royal interests”)(458)と安定性の中に見られる不安要素をあげている。

シェイクスピアが実在の王、エドワード3世を下敷きにしているのは紛れもない事実であり、ブラッドレイ・J・アイリッシュ(Bradley J. Irish)は「我々はシェイクスピアが材源を劇に翻案する方法がわかる。それはこの場合、物語るには負担になるがテーマとしては価値のあるように思われる材源を再び形成しなおす事を含むのである」(“we can observe Shakespeare’s method of translating his sources into dramatic form, including, in this case, the reimagination of source material deemed narratively burdensome but thematically valuable”)(138)と述べているが、安定性と不安要素という二面性を持つと考えられるエドワード3世の治世をどのように「テーマとして価値のある」作品に置き換えているのだろうか。作品のタイトルに王の名前が使われていることから、王権や名声といった事が重要なテーマとなっているように思える。そして実在のエドワード3世の二面性と同じく、作品にも主人公エドワード王(King Edward)が示すマイナス面があるように思われるのである。

劇の起こりは不正なフランス王座の継承に対してアルトワ(Artois)がエドワード王

に「我々の平和の正当な血筋の守り手」(“the lineal watchman of our peace”)(1. 1. 36)となるべく進言する事から始まるが、それに対してエドワード王は以下のように答える。

King Edward    This counsel, Artois, like to fruitful showers,  
                         Hath added growth unto my dignity,  
                         And by the fiery vigor of thy words  
                         Hot courage is engendered in my breast,  
                         Which heretofore was racked in ignorance,  
                         But now doth mount with golden wings of fame, . . . (1. 1. 42-7)

エドワード王    この助言はアルトワよ、恵みの雨のように  
                         私の威厳を大きくし  
                         お前の言葉の激しい活力によって  
                         私の胸に熱い勇気が生み出される。  
                         これまで無知で虐げられてきた勇気は、  
                         今、名声の金の翼によって立ち上るのだ……

アルトワの述べる不正に対する正義が、王によって名声や威厳というものに置き換えられてしまっているのが分かるであろう。この意味で王権や名声は、劇の起こりから重要なテーマとしてあらわれてくる。そして意味を変換させてしまうという取り違いもエドワード王の示すマイナス面を表すものではないだろうか。本稿では作品の主な出来事であるエドワード王による伯爵夫人(Countess)への恋とフランスとの戦争により、テーマである王権がどのような意味を持つのかを考察してみたいと思う。恋と戦争の有機的なつながりはあるのだろうか。そしてそれは王権にどう影響するのだろうか。

## 1. 王権の不適切

作品の主な出来事は、恋と戦争である。恋と戦争を重ねることは、文学的に頻出する事であるが、エドワード王による伯爵夫人への恋に王権の不適切を見出すことが出来る。そもそもソールズベリー(Salisbury)という夫がいる伯爵夫人に対して恋をして、また自分にも妻がいる身であるエドワード王が、伯爵夫人を手に入れようとする事自体が間違いである<sup>2</sup>。そしてその間違いの恋の中にもさらなる不適切を見出すことができる。

伯爵夫人を手に入れようと秘書のロドウィック(Lodowick)に恋文を書かせたエドワード王は、ロドウィックの書いた「月の女神よりも美しく貞節な方」(“ More fair and chaste than is the queen of shades ”)(2. 1. 142)という句について以下のような発言をしている。

King Edward      That line hath two faults, gross and palpable.  
                        Comparest thou her to the pale queen of night  
Who, being set in dark, seems therefore light?  
What, is she, when the sun lifts up his head,  
But like a fading taper, dim and dead?  
My love shall brave the eye of heaven at noon  
And, being unmasked, outshine the golden sun.

Lodowick      What is the other fault, my sovereign lord?

King Edward    Read o'er the line again

Lodowick                                ‘ More fair and chaste ’—

King Edward    I did not bid thee talk of chastity,  
                     To ransack so the treasure of her mind,  
                     For I had rather have her chased than chaste.  
                     Out with the moon line, I will none of it,  
                     And let me have her likened to the sun. . . .    (2. 1. 143-56)

エドワード王　その句には酷く明らかな間違いが二つある。  
青ざめた夜の女王に比べるのか。  
暗さの中であって輝くものなどに。  
太陽が頭をもたげると、  
ぼやけて消えてしまう先細りの火のように。  
私の恋人は昼を照らす天の目を恥じ入らせ、  
顔を見せれば光り輝く太陽よりも輝く。

ロドウィック　もう一つの誤りとは何ですか、陛下。

エドワード王　今の句をもう一度読んでみろ。

ロドウィック 「月の女神よりも美しく貞節な方」――

エドワード王　貞節について語れとは命じていない。  
あの人の心の宝を奪うようなものだ。  
なぜなら、貞節よりも私はあの人が求められる事を欲している。  
月の行は消せ、それはいらぬ。

私にあの人を太陽になぞらえさせろ。……

エドワード王は詩に二つの誤りがあると語っているが、まさに王は二つの間違いに気づいていない。伯爵夫人を月になぞらえる事に反対している王である。周期的に満ち欠けを繰り返す月は、女性のシンボルとして扱われるものであり、また聖書の雅歌6句10節の「満月のように美しく」(“Fair as the moon”)(Song of Solomon 6:10)に由来し、聖母マリアと重ねられることから、月は女性の象徴と考えられているものである<sup>3</sup>。この女性性を王はまさに否定している。また太陽は通常、男性性を表すものとしてギリシア神話などで明らかであるが、太陽と月の一对、男と女的一对を王は否定している。王自身の性、太陽となぞらえられる男性性を考えてみても、伯爵夫人を月に例える事に反対するのは、この恋自体を否定する事であり、王の矛盾は明らかではないだろうか。また貞節さを否定する事にも伯爵夫人の魅力の一つを否定する事へとつながらないだろうか。貞節さとは、昨今の女性の平等の権利という問題を考慮にいれたとしても、女性の美点の一つと考えられるものである。王はこのように、ロドウィックに対して指摘した二つの誤りについて、王自身がおかしている間違いに気づいていない。王が命じた恋文を書かせるという、王権の表象に不適切さを示している。また恋文を書けと命じておきながら、「恋は恋人の舌の中でしかうまく響かない」(“Love cannot sound well but in lover’s tongues”)(2. 1. 183)と語り、結局は自分でペンを走らせるという事も、王の示す矛盾であり、王権の不適切さと並べて考えてもよい事だろう。

フランスとの戦争の意味がアルトワの述べる正当性から、エドワード王によって名声のためへと変化する事は既に述べたが、血のつながった息子の問題ですらエドワード王にとっては名声や名誉と関係がある。戦場での大変な活躍によってフランス軍を追い詰めた息子が、深追いによって逆に窮地に追い込まれた、という報告を受けたエドワード王である。救援を求めるアルトワに対して、エドワード王は以下のような返事をダービー(Derby)にしている。

King Edward    Tut, let him fight; we gave him arms today,  
                         And he is labouring for a knighthood, man.  
Derby            The prince, my lord, the prince!    Oh, succour him!  
                         He’s close encompassed with a world of odds.  
King Edward    Then will he win a world of honour too,  
                         If he by valour can redeem him thence.  
                         If not, what remedy?    We have more sons  
                         Than one, to comfort our declining age.    (3. 4. 30-7)

エドワード王 構わん、戦わせておけ、あいつには今日武具をやった。  
あいつは騎士の身分を手に入れるため、頑張っている。

ダービー 王子が、陛下、王子が。どうか助けてやってください。  
王子は大変な苦境に取り囲まれています。

エドワード王 ならあいつは素晴らしい名誉を得る事になる。  
もし、武勇によってそこから抜け出せたならば。  
出来なかったなら、どうしようもない。私にはもっと息子がいる。  
あいつの他にも、私の老いを慰めるための息子が。

エドワード王自身のために戦場で華々しい成果を挙げている息子である。その息子が窮地に陥っている時に助けを与えず、窮地は名誉を増すものであるという勝手な結論を下してしまうエドワード王である。自分の為に戦う者への対応として、これは一種の裏切り行為であり、これも王権の不適切さではないだろうか。ましてや自分の息子への愛情という観点からも、足りない父親というレッテルを貼られても仕方ないと思える発言である。名声への間違った考えが明らかである<sup>4</sup>。

『ヘンリー5世』(*King Henry V*, 1600)と『エドワード3世』の関係について述べるE・パールマン(E. Pearlman)はエドワード王と息子の関係について「確かに最も力強い父親が襲撃している息子を見守り、耳を傾ける場所としての丘は、『エドワード3世』の風景の中で目立つ特徴である」(“Surely the hill from which the most mighty father watches and listens for his foraging son is a conspicuous feature in the landscape of *Edward III* ”)(528)と述べているが、これはこの状況において当てはまる事だろうか。私の意見ではこの批評はこの場面には当てはまらず、むしろ逆に息子を邪魔な存在として排除するエドワード王の姿が見られる。息子に対して高い位置から見下ろすというパールマンの考えには賛成であるが、見守って耳を傾け、息子を気遣っているという意見には反対である。息子への慈悲ではなく、無慈悲を表すエドワード王である。

ここまでエドワード王の行動と態度に注目してきたが、彼に付与されている王権という力には不適切さがある。恋文への反応、息子への反応、どちらをとってもエドワード王は不適切さを示している登場人物である。シェイクスピアの劇において、足りない王というのは頻出するモチーフであるが、この『エドワード3世』においても、その特徴を見出すことが出来る。彼の示す王権は危うい。しかもエドワード王自身は、この王権による行動の間違いと不適切さに気づいていない。危うさに気づかないエドワード王である。

## 2. 女性による補う力

王権の不適切さを補っているのは女性の力である。王の邪な恋の相手、伯爵夫人、そして王の妻である王妃もエドワード王を正しい方向へと導く存在として大きな役割を果たしている。まずはじめにエドワード王による得られない恋愛から考察してみる事にする。

伯爵夫人の夫ソールズベリーと王妃を殺してまで恋愛を成就させようとする王の考えは極端であり、身勝手なものである。この極端さをケネス・W・ヒートン(Kenneth W. Heaton)は以下のような言葉で説明している。

Shakespeare realized that extreme emotion can have powerful, indeed dangerous, effects on the human body. In this respect he was not unique. In Greek mythology, which pervades early modern writings, extreme emotion could lead not only to madness but also to physical transformation (or metamorphosis), which, arguably, is akin to death. (1337)

シェイクスピアは極端な感情は力強く、実際に危険な影響を人間の体に及ぼしうる、という事を自覚していた。この観点で彼は独特ではない。ギリシア神話では、これは近代初期の作品に行き渡っていたのだが、極端な感情は狂気につながりうるだけでなく、死と同じように考えられる、肉体的な変形、あるいは変身にもつながりうるのだった。

この極端な感情の危険性は、まさに王の恋とその相手に及ぼす影響という点で当てはまる。自分を口説き続けるエドワード王に対して伯爵夫人は自分の持っている二つの短剣の一方で王が王妃を殺し、自分は夫であるソールズベリーを殺すと提案する。伯爵夫人の夫は、自分の心の中で眠っており、自身の胸を片方の短剣で突き刺そうと述べる。このように王妃と自分の中にいるソールズベリーが死ねば、伯爵夫人とエドワード王は結ばれるはずだ、という伯爵夫人の矛盾した提案である。実際は自分を刺せば命がなくなるわけで、この恋の不可能性は明らかである。伯爵夫人の死により、恋の実体が得られないエドワード王を示している。王による極端な感情の結果として、人間の体への危険が生じるという例ではないだろうか。

この伯爵夫人の命をかけた行動の結果、エドワード王は「私は二度と決して口に出すつもりはない / 求愛のためのどんな言葉も」(“I never mean to part my lips again / In any words that tends to such a suit”)(2. 2. 190-1)と改心し、誤りを悟る。ないがしろにしていた一連の軍事行動も再開するようになる。伯爵夫人による王の間違いの訂

正は、大きな意味を持つのである。

自分の胸を刺すことにより、恋愛が成就し、同時に命もなくす、という恋愛の実体のなさを自覚させ放棄させる事により、伯爵夫人はエドワード王に戦争という現実の問題に取り組ませる。伯爵夫人という女性は、エドワード王にとって、現実へと引き戻す力となっていると考えられる。エドワード王を本来なすべき仕事へと導いたのである。この事は J・P・コンラン(J. P. Conlan)が述べる「賢明な女性により、結婚生活への王権の行使を否定しているが、『エドワード 3 世』は劇として王位の特権を少しも減じていない。なぜならエドワードはソールズベリー伯爵夫人の不承認により、威厳を失う羽目にはなっていないからだ」(“Permitting noble women to deny the Crown’s supremacy over wedlock, *Edward III* shows dramatically, does not detract in the least from the prerogative of the Crown, for Edward does not suffer loss of majesty from the Countess of Salisbury’s noncompliance”)(191)という意見に強化されることだろう。女性の力により王権は間違いを訂正され、王権の威厳は補われる。伯爵夫人の役割が明らかである。

アルトワの述べる正当性のための戦争というよりも、名声のための戦争としてフランスに対して軍事行動をとったエドワード王であるが、戦場でのエドワード王のフランス市民に対しての扱いは、名声とは程遠い。町を攻め落とそうとするエドワード王による兵士たちへの命令は、「皆、剣を抜け。略奪して自分のものにして構わぬ」(“Put all to sword, and make the spoil your own”)(5. 1. 7)というものである。6 人の市民が下着姿、裸足、首つり用の縄をつけて登場して、大衆が助かるものなら自分たちはどんな拷問による死も受け入れるから、町への侵略はやめてもらいたいと王に助けを求めても、王は彼らの願いを無視して、兵士たちに処刑を命じる。王の求めている名声に全くふさわしくない行動であるのがわかるであろう<sup>5</sup>。この 6 人の市民による町への慈悲を願う場面は、読者と観客に憐れみを誘う場面である。実際の演劇を観るという受容の問題を考えた時に、エドワード王の無慈悲が、印象に残る場面ではないだろうか。作品を作る側だけでなく、観る側による印象によって作品の意味が決定するという受容理論的な批評を行っているケート・ランボールド(Kate Rumbold)は「創造性とは、制作して監督し、観客をうならせるような光景の演技を行う人々によってのみ成立するのではなく、観客によっても刺激されるものである」(“Creativity is not only found in the people who produce, direct, and act audience-wowing spectacles, but can be stimulated in visitors, too”)(325)と述べ、この場面の観客に与えるエドワード王の無慈悲さの印象という作品の性格を示唆している。エドワード王の名声とは正反対の残酷さが強調されている。

しかし、剣の暴力による名声の失墜は、エドワード王の妻王妃の発言により回避される。王妃の台詞をここで引用してみたいと思う。



Queen Ah, be more mild unto these yielding men!  
It is a glorious thing to stablsh peace,  
And kings approach the nearest unto God  
By giving life and safety unto men:  
As thou intendest to be king of France,  
So let her people live to call thee king,  
For what the sword cuts down or fire hath spoiled  
Is held in reputation none of ours. (5. 1. 39-46)

王妃 どうか屈している男たちにもっと優しくしてください。  
平和を成立させるのは栄光です。  
そして王とは神に近づくのです。  
人々に生命と安全を施すことによってです。  
あなたはフランス王になるつもりなのですから、  
人々にあなたを王と生かすことによって呼ばせるのです。  
剣が切り落とし、炎が台無しにするものは、  
私たちの名声には、全くならないのですから。

暴力の破棄によって名声は確立されるという王妃の言葉である。エドワード王の示した無慈悲とは反対の慈悲による名声の確立である。これが理想の王の姿として相応しいのは明らかであろう。そしてこの王妃の言葉により、エドワード王も考えを改め「愛情」(“affections”)(5. 1. 51)や「温情」(“clemency”)(5. 1. 54)という言葉によって、恐怖政治への反対を示すようになる。失われかけたエドワード王の名声は王妃の言葉により、救われたと言える。そして町の市民による「陛下にご長寿を、治世が幸福でありますように」(“Long live your highness, happy be your reign!”)(5. 1. 56)という祝福を実際に得る事になる。この意味で王の求めた名声は、実際に得ることが出来たと言えるのである。実体に近づく名声という観点でも王妃という女性の果たした役割は大きい。

伯爵夫人はエドワード王の恋愛に関して、王権の間違いを指摘し、戦争という実際の問題に彼を引き戻した。そしてエドワード王妃はフランスとの戦争のさなかにおいて、王が求めていたはずであるが、暴力によって失いかけていた名声を、慈悲という観点で、実際に得させる役割を果たした。女性の果たした役割は『エドワード3世』において大きなものであることが分かるであろう。どちらも王権に深くかかわる重大な事なのである。

## 結論

第1節ではエドワード王の恋文に見られる女性の美点と、この恋の自身による否定という矛盾に見られる王の間違い、そして戦場で命がけで戦っている息子に対しての無慈悲という王の間違いを示した。王権は恋と戦争の両方において不適切さを示している。第2節では、伯爵夫人に拒まれた恋愛の結果として、王の本来の仕事である戦争に意識が向いた事、そして戦争の最中にあるフランス市民への残酷さを妻にとがめられた結果として、改心したことにより王権の不適切さが正しい方向に向かい、王の求めた名声獲得に近づいた事を示した。恋と戦争において表れた王権の不適切さは、やはり恋と戦争によって王権の適切さが示されたのである。

フランスとの戦争の勝利後に、命を懸けて戦った息子のエドワード王に対しての言葉をここで引用してみたいと思う。

Prince Now, father, this petition Edward makes  
To thee, whose grace hath been his strongest shield:  
That as thy pleasure chose me for the man  
To be the instrument to show thy power,  
So thou wilt grant that many princes more,  
Bred and brought up within that little isle,  
May still be famous for like victories; . . . (5. 1. 216-22)

王子 さて、父上、エドワードにはお願いがあります。  
あなたのお恵みが最強の盾だったのですが、  
あなたの喜びが私を男として選んでくれました。  
あなたのお力を示すためにです。  
なので、他の多くの王子にもお与えください。  
あの小さな島で生まれ育った者たちです。  
同じような勝利の名声をお与えください。

命を失いかけた王子の口から出たのは、エドワード王への敬意と名声の共有への願いである。今、戦争の勝利により、エドワード王は彼の求めた名声を手に入れたのである<sup>6</sup>。王の威厳と名声は、戦争の勝利と共に確立されたわけであるが、その過程で伯爵夫人や王妃に諭された王の持つべきモラルが名声の獲得に大きな役割を果たしているのは注目すべきことである。邪な恋の放棄や市民への残酷さの改心はまさにモラルの

問題である。モラルと政治の問題をジェレミー・ブラック(Jeremy Black)は、18世紀の思想について言及しているが、彼の「政治とモラルは同時代の人間に区別されていなかった。それどころか、その関係は少数の個人の明らかな政治的重要性や王権と統治のモラルある行動という考え故に、強く注目されていた」(“ Politics and morality were not differentiated by contemporaries. Instead, their relationship was strongly focused because of the obvious political importance of a small number of individuals and because of the notion of kingship and governance as moral activities ”)(8)という考えは普遍的な思想として、シェイクスピアが舞台として選んだこの作品にも当てはめられる事ではないだろうか。エドワード王が女性の力によって、モラルに注意を払うようになったことから王権は正しい方向へと導かれたのである。

本稿の問いは主要なテーマであるエドワード王の恋とフランスとの戦争に有機的なつながりがあるのか、そして王権はどのような意味を持つのかを明らかにする事であった。王の求めた名声は戦争の勝利と共に獲得されたわけであるが、その元には得られなかった恋の間違いに気づき、本来の戦争という仕事に王の意識が向いた事、そして戦争中における市民への慈悲により、王権に相応しい名声が得られた事などがある。元々エドワード王の抱いていた王権の間違いが、恋と戦争により正しい方向へと向かい、王の求めた名声が戦争の勝利と共に満たされた。恋と戦争の有機的なつながりは明らかであり、不適切な王権は正しい方向へと導かれた。王権の意味の変化である。これが『エドワード3世』の喜劇性成立の意味であり、本稿の出した答えである<sup>7</sup>。

実在したエドワード3世はガーター勲章という名誉の賞を作り、名声に関連付けられる王であった。この作品が名声への考えを重視し、テーマにも深くかかわっているのも偶然ではないかもしれない。ガーター勲章の愛称であるブルーリボンに相応しいスポーツの誉れが、オリンピックを目前にした現在、オリンピックのメディアを通して、人々の目に多く見られる事を期待して、本稿を閉じる事とする。

## 註

1. 以下、『エドワード3世』からの引用は、Cambridge UP、The New Cambridge Shakespeare シリーズの *King Edward III*, Ed. Giorgio Melchiori, 1998 年の版に拠る。
2. 伯爵夫人との会話で、自分の妻である王妃を殺す約束までするエドワード王である。恋愛を狂気と考える思想は古くからあるが、このエドワード王の状態は常軌を逸したものであり、現実が全く見えていないと言える。
3. 他に女性と月を関連付けるものとして「黙示録」の幻で、月に足を乗せた女性が現れる。この女は新しいエヴァである。また反宗教改革の美術では、原罪を伴わない妊娠を図像化し、そこには三日月が描かれる。
4. 辛さにより息子が名誉を得る事になる、というエドワード王の考えは、逆に息子への無慈悲さにより、自身の名声を落とす行為と考えられ、名声を引き合いに出しながらも、それを失うという矛盾が見受けられる。
5. しかも町への侵略の開始命令は、期限の2日前であり、期限を守らないエドワード王の横暴さがより際立つのではないだろうか。期限を設定しておきながらもそれを守らない王に、気まぐれの感情を読み取ることが出来る。
6. 家来である息子の名声が高められる事により、その上にあるエドワード王がさらに名声を高められる、という思想は時代も国も違うが、清少納言の『枕草子』中にも見られる。随筆として自分の自慢に思える箇所が、実は自分を高める事で、自分が仕える中宮定子の存在が高められる、という表現になっている。
7. 通常『エドワード3世』は歴史劇と考えられるが、喜劇的結末という観点で、ここでは喜劇という言葉を使う事にする。悲劇と喜劇という最も簡単な分類の仕方に倣ったことによる。

引用・参考文献

- Black, Jeremy. "John Wesley and History." *Wesley and Methodist Studies*, Vol. 9, No. 1 (2017), <https://www.jstor.org/stable/10.5325/weslmethstud.9.1.0001>, pp. 1-17.
- Conlan, J. P. . "Shakespeare's *Edward III*: A Consolation for English Recusants." *Comparative Drama*, Summer 2001, Vol. 35, No. 2 (Summer 2001), <https://www.jstor.org/stable/41154075>, pp. 177-207.
- Heaton, Kenneth W. . "Faints, fits, and fatalities from emotion in Shakespeare's characters: survey of the canon." *BMJ: British Medical Journal*, 23-30 December 2006, Vol. 333, No. 7582 (23-30 December 2006), <https://www.jstor.org/stable/40700603>, pp. 1335-8.
- Irish, Bradley J. . "Writing Woodstock: The Prehistory of Richard II and Shakespeare's Dramatic Method." *Renaissance Drama*, Vol. 41, No. 1/2 (Fall 2013), <https://www.jstor.org/stable/10.1086/673905>, pp. 131-49.
- Jackson, MacDonald P. . "Arden of Faversham and Shakespeare's Early Collaborations: The Evidence of Meter." *Style*, Vol. 50, No. 1 (2016), <https://www.jstor.org/stable/10.5325/style.50.1.0065>, pp. 65-79.
- Karras, Ruth Mazo. "England in the Reign of Edward III by Scott L. Waugh." *A Quarterly Journal Concerned with British Studies*, Vol. 24, No. 3 (Autumn, 1992), <https://www.jstor.org/stable/4050956>, pp. 458-9.
- Kirwan, Peter. "The First Collected 'Shakespeare Apocrypha'." *Shakespeare Quarterly*, Winter 2011, Vol. 62, No. 4 (Winter 2011), <https://www.jstor.org/stable/41350157>, pp. 594-601.
- Ormrod, W. M. . "Edward III and His Family." *Journal of British Studies*, Oct., 1987, Vol. 26, No. 4 (Oct., 1987), <https://www.jstor.org/stable/175720>, pp. 398-422.
- Pearlman, E. . "'Edward III' in 'Henry V'." *Criticism*, Fall, 1995, Vol. 37, No. 4 (Fall, 1995), <https://www.jstor.org/stable/23118251>, pp. 519-36.
- Rumbold, Kate. "From 'Access' to 'Creativity': Shakespeare Institutions, New Media, and the Language of Cultural Value." *Shakespeare Quarterly*, Fall 2010, Vol. 61, No. 3, Shakespeare and New Media (Fall 2010), <https://www.jstor.org/stable/40985587>, pp. 313-36.
- Shakespeare, William. *King Edward III*. Ed. Giorgio Melchiori, Cambridge UP, 1998.